

## 宿題のきめ方について、其他

有賀花左エ門

村落社会研究会が火災したのだが、今迄の所本日の研究調査の仕事は少しも手をつけていないで、その準備にはかり返られていた恰好だった。準備といえども研究の一部分は村研の成立には大切な仕事であるとはわかつてゐるつもりだが、もうすぐやる各の各地区別の研究集会も全然やっておられないのでおのうな感じが強いのだ。

準備の仕事も中々大切な事柄で、準備が充分に出来たら、あとの研究調査や大会の共同調査もうまく行くこと必定と思うが、この準備の仕事にもどうも書く行かぬ点が多いのは残念だ。これには本部の仕事を受けれた我々の杜方に不備が多いからだと思ふ。最初を考えようとして研究通信はそれをうまく運営すれば準備の仕事ももつとよく行つた筈と思うが、今迄はうまく行ひなかつた。本部のやり方に対してはと會員諸君からの批評がほしいと思つてゐる。これではとてもや

り切れないという程の酷評をほしいと思つてゐる。何も云つてもわるいといふ、ついでこれに良いのかと思ひたがる。今迄の所では始末に困る程の手帳が来ないので、大抵研究通信の一部をしか埋め得ない。

年報についても、宿題についても、會員諸君からいろいろの意見が来ると仕事ややり良い。委員会できめた事を承認してもらふような形で持つて行きたくないのが我々の気持ちだ。委員会は便宜な場所にいるから、もつと各地会費から意見を送つてもらつて委員金のまともな動かしてもらふのでなくしては、委員会が仕事が出来ない。しかし今迄の研究通信は印刷も下手で、小学生の程度だといふお叱りを受けた位で、交流の役目を果たし得なかつた事も認めてゐる。こゝは下手な印刷では意見を出しても、何を云つてあるのかわからぬといふ点で出し差された人もあつたやうと思つてゐる。この点は本部の手落ちだから、この事は改めるつもりだが、年報の編集についての御意見も少かつたし、宿題についても少かつた。これは対研の将来を決定して行く上に大変遺憾と思つてゐる。意見が少数しか来らぬのでどうしても一部の人が考へる傾向が強

くなつてしまふ。これでは困ると思ふ。

宿題についての御意見を聞るに、委員会の融合に対する批判を少しも頂いてゐるのは非常に有難いと思つてゐるが、批評だけ具体的プランの作成についての提案が少い事を残念に思つてゐる。委員会が具体案を作るだろうという気持ちでなく、自分の案はこれこれだかこれを採用して貰いたいという気持ちで出して頂きたい。委員会はそのういう案が出て来たら、それを問題にするが決して委員会としてインシアティブをとる事はしないつもりだ。今迄の所そのようには必ずしも行かへなかつたかも知れないが、委員諸君もそのつもりでゐる。

今度の宿題のきめ方について不満に思ふ方もあると思ふ。

その中で我々に予想出来る考への一つとしては、今度の取上げ方は、実際には研究者によつて比較的連絡なく、バラバラになりはしないかとの懸念である。したがつて村研といふ聯合をなつた会合の目的に對して逆は、従来の村研研究と余り異ならぬ結果しか出ないだらうという不満である。

村研の研究通信が出てからすでに数氏の意見に見られた如く村落社会研究の統一の基準を立てる要求又は総合的調査、量化的調査の導線が強く出ていた。これは今迄の個別的研究の尺牘を不協とするからである。この尺牘は同輩の士がすでに多く感じている所で、その世論として燃え上っていると思つたのである。村研が求めたのも、そういう要求に答える何物か、期限は此方からであつたと思つた。だからこれが必要であるといふだけの事なら、今更云わぬでもないが、答のものではあるが、それを云わずにいられぬといふ所に我々の切実な要求も又あるのである。だから宿題委員として此らの事を充分知つておる筈であるし、自分でも腹じておる。そして委員会が論議して未だ半も、その内題意識において、いかにしてその方法を立てるかという事が極端にある筈である。もしそれにも拘らず、それが出来ていぬかつたとすれば、責任は委員会にある事はたしかであるが、一面では従来以上の具体的提案をしてくれなかつた委員の方にもあるわけだと思つた。委員といつても、まだお互に親しく話し

合つた輩の若い人も多しから、日本人的遠慮が相互の間にあつて、云いたい事も云えぬといふ事もあるかと思つた。村研の進歩のためには是非私案を出して委員会を内容あるものにして頂きたいと思つてゐる。今度の宿題では農村改革に影響された村落構造の變化に中心点があるので、農地委員会を通じて一定の政策が具体化された時、農地委員会を動かす委員とその政治的背景——承継——が村落構造の上でどんな風にあらわれて来たか、は一つの重要な要素である。どんな農村政策でも、それが重要なるものであれば、村落構造にいろいろの影響を与え得るとしても、農地改革の場合はその極めて特殊な内容のために在米の諸集團の結合に極めて大きい影響を与えてゐる。それを放棄せしめ、又新しい集團を作り出してゐる。それ故にこの政策を賛成してこの新しい變化を生ぜしめて行つた個人の動きは、この問題を考える時重要性を持つ。改革終了後の段階でそれは更にいかなる變化をしたであらうか。これは更にいかなる變化をしてゐるから、どこから我々のテーマに近よつて行つても、そんなに個人々々の提案方がバラバラになる氣遣ひは起くと考へる。又農地改革から直接にはずれた村落の場合であつても、これに関連した戦後政策は村落を大きく變化せしめてゐるのだから、農地改革のバックを収めた戦後政策は農地改革の有無によつていかなる差異があるのか比較して見るなら、我々に教える所が大きい。

い事も疑いはない。農地改革とはいかなる改革であつたか、又果して改革であつたのか、これを戦後政策の全体において位置づけ、日本の戦後の變化全体の上でこれを捉えねいと、農地改革を大寫にする事だけではその本當の意味は捉えられぬと思う。